

アボカド



Layback

双子の王

双子の王は声を揃えて言った。「余はアボガドが食べたいぞ」臣下は答えた。「王よ。アボガドではありません。アボカドです」王は困惑する。「ではこの余った点々をどうしろと言うのだ」「お身体にでも貼ればよろしい」双子の王は身体に点を貼り付けた。その瞬間、王の間に玉が二つ転がった。

ポテト

道端にマクドナルドのポテトが落ちている。今だけ全てのサイズが150円で売られている為、調子に乗って買った愚か者が食べ切れずに捨てたのだろう。可哀想に。私はしなびたポテトを拾い上げる。家へ持ち帰り介抱をしてやると、ポテトはとても喜び、揚げ上がりの音でぴいと鳴いた。

少女

少女が馬車に撥ね飛ばされた。だが駆け寄る者はない。足を止める者すらいなかった。不意に世界の音量が下がる。人々の動きがぴたりと止まる。街は静寂に包まれる。少女の背中から翡翠色の羽が生え始めた。美しい鳥が目覚ます。途端に世界は再び回り出し、少女は大空に飛び立った。

巨人兵

街は完全に壊滅状態だった。巨人兵はへし折った東京スカイツリーを振り回しながら迫ってくる。手榴弾は尽きた。背囊の中を探るとバナナが出てきた。これが最期だと思って食べた。涙があふれた。もう家族とも会えない。奴のせいで。俺はバナナの皮を投げつけた。巨人兵は足を滑らせ、ひっくり返った。

竹輪

煙草が千円になったので竹輪に代えた。一日一本。健康にも良いし家計にも優しいと妻も喜んでいゝ。目覚めるとまず竹輪を啜ゑる。穴越しに吸う朝の空気は格別だ。仕事に疲れたら竹輪を啜ゑる。心が安らぐ。一日の終わりにその竹輪でビールを飲む。嗚呼美味い。竹輪よ今日も有り難う。

ボウリング

地獄にボウリング場なんてあんのかよ？ 正直思ったが本当にあった。一丁目に。玉を置く台にはずらりと生首が並んでいる。さすが地獄。俺は丸顔の男をチョイスする。中指と薬指を鼻に、親指を無理やり口にねじ込み、胸の前で生首を構える。ピンがあるべきレーンの奥には手首や足首が整列していた。

眼球譚

縁日の提灯に火が入り、すくりと夜が立ち上がる。目当ては眼球掬いだった。目玉のおやじに百円玉を三枚渡し、ポイを受け取る。水槽の中には眼球がひしめき合っている。「もし売れ残ったらどうするの?」「手足が生えてきたら売り物にならねえからな。捨てられるのさ。俺みたい

タマゴ

クルマにはねられた。おれは宙を舞って舞って舞って、うっわー今日の空超青えーなんてのんきなことを思いながらアスファルトに叩き付けられた。ぐしゃりとタマゴを潰したような音がした。そこで意識は途切れた。目が覚めたら辺りにはもう誰もいなかった。道路に黄身がこぼれていた。

女の木

決して近づいてはならぬと言われていた。だが気がついたらその巨木の前に立っていた。甘ったるい香り。湾曲した枝から幾つもの肉袋が垂れている。地表近くまで届いた袋の中を覗き込むと粘液まみれの少年の顔が見えた。「触るな」長老の声がした。「その子はもう助からん。男を養分にする木なのだよ」

分割

血液型を訊かれ、AB型だと答えれば、二重人格なんでしょ？ と返される。腹立たしい。俺はA型の俺とB型の俺に俺を分割する事にした。きっと葛藤もなくなる筈だ。居合いの達人を呼んだ。俺は見事に斬られた。だが達人は切りどころを間違えた。AB型の俺が二人になってしまった。

ブタさん

事後、煙草をふかしながらTVを見ていた。『トラックが側壁に衝突、横転し、荷台のブタ17頭が逃走しました』「さんをつけろよデコ助野郎」「え?」「ブタさんにさんをつけろっつってんだよ」「ああ。ブタさん好きだもんね」「服着ろ」「は?」「服を着ろ。助けに行くぞ。17頭のブタさんを」

trick or treat

門柱の上にはジャック・オー・ランタンが飾られている。たまに実家に帰るといまだに俺は子供扱いで母親はお菓子を買って待っていたりする。もうお菓子はいいからそれよりおふくろの味を頼むよ。再びベルを鳴らすとドアが開いた。トリック・オア・トリート・オア・カボチャのタイタン！

三枚

妻に浮気がバレた。煮るなり焼くなり好きにしろい。開き直って寝て起きた。三枚に下ろされていた。前面。中骨。後面。いちおう三体とも動く。だが中骨と後面では生活するのに不便だ。なにしろ食事もままならない。前面で暮らすことにした。只一つだけ困った。後ろから見るとグロい。

カイワレ

「お天気はいいし、あたたかいし、ひさしぶりに自転車に乗ってみようと思って、自転車置き場に行ってみたら、サドルにカイワレが生えてたの。ひどいいたずらでしょう？ おしりで踏みつぶすわけにもいかないし、抜いてしまうのもかわいそうじゃない。だから」「立ち漕ぎで来たのか」

ハゲ

「もし僕がハゲたらどうする？」「あなたがハゲたら？ 別れるわ」「ひどいな」「わたしはね。ハゲ散らかしている人が大の苦手なのよ。うちの父がそうだったから。あなたも見たでしょう？」「ああ」「あなた、もしかしてハゲるつもり？」「バカだな。ハゲやしないさ」僕は彼女をハグした。

瞳

若い女がベンチに座り込んで泣いている。一人の男が声をかけた。放っておけなかったのだろう。どうしたの？ 男は女の頬に手を当てる。その途端、女の瞼が虎ばさみのように閉じた。男は必死に逃げようとするも長い睫毛が男の指を捉えて離さない。男は女の瞳に飲み込まれてしまった。

ぽつり。またぽつりと雨が降ってきた。「折り畳み傘なんて持ってないよね」「ごめん」「あやまらなくてもいいじゃん。コンビニでビニール傘買う？ それとも、どこかで雨宿りする？」勢いにまかせて言ってしまった。ホテル街のネオンが近づいてくる。「大丈夫。傘呼んだから」UFOが降りてきた。

美人

私をブスにして欲しいんです。美容外科医にそう言うと驚かれた。子供の頃から顔が整っているのがコンプレックスだった。美人であるが故の苦労も多かった。術後、鏡を見せられた。美人がそこにいた。なぜ？ これ以上は無理です。医師は目をそらせた。私はため息をつく。またお医者さんを探さなきゃ。

休暇

「お母さんは休暇をいただきます。会社員や学生のあなたたちに休暇があるのだから主婦のお母さんにも休暇があつていいと思うの。一週間は帰りません。家の事はよろしくね」書き置きがあつた。「母さんどうしたんだ?」「さあ」「とりあえずご飯を炊くか。米って洗うのか?」「さあ」

壁

男と女の監房は見えない壁で仕切られている。男は何度も壁に体を打ちつける。看守達はそれを見て楽しむ。馬鹿な奴だと。やがて男の体は崩れ始める。このままでは死んでしまう。だが看守が止めろと言っても男は聞かない。1,001回目。遂に男は壁をすり抜ける。体だけが独房の床に残っていた。

@null

@null 突然のリプライ失礼致します。先ほどたまたまツイッターで貴方を見つけてとても驚きました。星新一さんの作品の中で無色透明な主人公として描かれていたあのエヌ氏のアカウントが存在してただなんて。早速フォローさせて頂きました。今後とも宜しくお願い致します。

瞬間

夜が始まる瞬間を撮るつもりだった。公園のベンチに座り、カメラを構える。日が傾き始めた。西の空は刻一刻と表情を変えてゆく。今だ。シャッターを切ると同時に何かがファインダーを横切った。自転車だった。現像してみると少女の横顔が写っていた。恋が始まる瞬間だった。

カット

「髪切りなよ」「まだいい」「ボサボサだよ?」「面倒くさい」「切ってあげようか」「切れるの?」「うん」「じゃ切って」「ごめん。上手く切れなかったね。やっぱりカット行きな」「いい。これで。もったいない」「ケチだなあ」「違うよ。もったいないだろ。せっかくお前が切ってくれたのに」

自家製ヨーグルト

冷蔵庫から自家製ヨーグルトを取り出した。牛乳に混ぜて一晩置いておくとヨーグルトになるというあれだ。種は先日お隣の奥さんに分けてもらった。素朴な味だが飽きない。めずらしく妻の胸で娘がぐずっている。「どうした」「飲まないのよ。おっばい」「どれ」味見をしてみた。「すっばい」

あなたの香り

わっ。突然後ろから肩を叩かれて驚かされた。いつもなら姿が見えなくても近づいて来るあなたの香りですぐ気づくのに。少し怒ったふりをして私がそう言うと、彼は笑いながら、だから今日は風下から来たんだ。だって。どこのハンターさんですか？

電話

『おはようございます。朝ですよ』「おはよう。いつもありがとう」『どういたしまして』 半年前、突然電話が鳴った。『私は捨てられるのですか』「君は誰？」『この電話機です』「ああ、解約するつもりだが」『私をこのまま側に置いていただけませんか。きっとお役に立ちますから』

骨折

事故に遭って足を折った。複雑骨折で即手術。リハビリも相当大変そうだ。病室で落ち込んでいるところに彼女が見舞いに来てくれた。と思ったら別れ話だなんて。「最後に聞かせてほしい。イケメンでもないし、勉強もできない。そんな俺のどこが好きだったの?」「足が速いところかな」

コタツ

電子音が鳴る。出撃命令だ。面倒だが仕方がない。私は手探りで布団の中のスイッチをONにする。コタツはふわりと宙に浮き上がる。私の足元でまどろんでいたミーコが不満げな顔をする。ごめんね。出撃なの。ミカン弾の数は十分。自動で開いたシャッター窓から私と戦闘コタツは勢いよく飛び出した。

捕虜

夜になってリサの運転するトラックが兵舎に帰ってきた。「ネコ科最強の獣を捕虜にしたわよ」助手席から降りたリカルドもニヤリと笑う。街の中心部には確かに動物園があった。脱走したトラでも捕らえたというのか。リカルドが荷台の幌をそっと開ける。月明かりに照らし出された子猫がミャアと鳴いた。

失敗作

闇に火の手が上がる。「神よ、近頃紛争の種を蒔きすぎではありませんか。下界では人間どもがまたぞろ激しく揉めておりますが」「種など蒔いてはおらん。放っておけば勝手に争いはじめるのだよ。わたしの創作物としては完全に失敗作だったが、まあじきに絶滅するだろう。自らの手で」

帰省

金曜の夜。同僚の誘いを断って特急に乗り込んだ。お供に缶ビールを一本。駅弁は我慢した。実家に帰れば残り物でもなんでもあるだろう。景色を見ようと思い、窓を覗いた。若い頃の母がそこにいた。なにも皺まで似なくていいのに。ため息がでた。最寄り駅まで約二時間。お母さん、驚くかな。

むすめ

「あいつはどうしてるんだ」「お父さんったらそればかり。自分で電話すればいいじゃないですか」「元気にしてるのか」「ええ、元気にしてるみたいですよ。お父さんがお酒飲みすぎてないかって逆に心配してたくらい」「正月は帰ってくるのか」「もう、いい加減にしてください」

待ち合わせ

「ごめん、急に残業になった。先帰る？」彼氏からメールが入る。「どれくらい？」「1時間」「待ってる」メールを返す。「トールノンファットエクストラホイップホワイトチョコレートモカ」店員さんが魔法を唱える。君よ、はやく来たまえ。私はマグに降り積もった雪をふうっと吹いた。

神経衰弱

神経衰弱をやるなら人は多い方がいい。渋谷駅前の交差点を選んだ。おれは無作為に人を二人釣り上げる。口からべろりと裏返す。AとB。ハズレ。身体を元に戻して道に置く。相方が二人釣り上げる。べろりと裏返す。ABとO。たった四つの型なのに何故かなかなか当たらない。

夕焼け部

「何をさっきからぶりぶりしてるの」「だってお母さん、学校の屋上を利用できるのって天文部だけなんだよ？ 夕焼け部だって立派なクラブ活動なのに」「いいじゃないの。こうして河原から見る夕焼けも素敵なんだから」「よくない！」「ところで夕焼け部の部員は今何人だっけ？」「……。一人」

「早く逃げなきゃ」部室に駆け込んできた菜々は言う。「ここに隠れてた方がよくない？」「こんな木のドアすぐ破られちゃうよ」「でも逃げるってどこに？」既に校舎はゾンビに囲まれていた。菜々は真剣な表情で天井を指差す。「屋上」うちの部だけが屋上に出られる扉の鍵を持っていた。

狼少年

狼少年だった。小さな頃から嘘ばかりついていた。まったくこの子はろくな人間にならないよ。周りの大人達はみな呆れてそう言った。やがて誰も話を聞いてくれなくなった。僕はホラ話を紙に書くようになった。木箱の中の嘘はどんどん膨らんでいった。いつしか僕は小説家になっていた。

見ないで

絶対に携帯は見ないでね。女はそう言った。借金の返済が滞ることはなかったし、二人の関係は常に良好だった。だが、ある日、私は彼女の携帯を見てしまった。援交絡みのメールだらけだった。「君は自分の体を売って?」「見たのね」彼女は最後の返済金をテーブルの上に置き、私の前から永遠に消えた。

血液型

「お前には血液型とかないよな」狼男が茶化して言う。「あのな。俺だってずっとこの姿だったわけじゃないんだよ。生前は血も肉もあったんだ。血液型性格診断もどうかと思うが、人を見かけだけで判断するのも良くないぜ」そう言うと、骨男はギターケースを担ぎ、スタジオから出ていった。

クリスマスケーキ

「クリスマスケーキのご予約はお済みですか？」サンタの格好をした女の子に声をかけられた。
「僕、恋人いませんから。あと一カ月じゃできるわけもないし」自嘲気味にそう言うと、「大丈夫ですよ」彼女は天使のように優しく微笑んだ。これはもしかしてフラグ？ 「賞味期限は来年のクリスマスですから」

爆破テロ

伏せた途端、後ろで爆発音がした。爆風が身体の上を駆け抜けた。薄く目を開けると、赤い服の切れ端や、獣の角、何のものとも判らぬ肉片が、ぱらぱらと降り落ちてきた。24、25、数字の残骸が転がっていた。翌年から暦には修正が加えられた。12月23日の次の日は12月26日。

乳首にピーラーの刃を当てて一気に削ぎ落とした。縛られた男は猿轡の隙間から呻き声を漏らした。「そんなに気持ちいいの？　じゃあ次はあそこね」バナナカッターを見せる。男は目を見開き、激しく首を横に振る。「どうしたの。つるつるになりたいんでしょ？」男は遂に失禁した。

自家発電

ふっと部屋の照明が暗くなった。おい。私は妻を呼ぶ。我が家は自家発電だ。私と妻がそれぞれ電極を握り、そしてキスをする。すると電流が流れる。つまり、キス発電だ。だがおかしい。今日にかぎって電流が走らない。「あなた。私に飽きたの?」「ち、違う」雷が落ちて、ふたたび照明が点いた。

おしっこ

おしっこは座ってして下さい。母が父を叱り付けている。座って小便をする男がどこにいる。父はその広い額に血管を浮かせ抗弁する。あなたも一度トイレを掃除してみれば判りますよ。母は雑巾を手渡す。父は渋々トイレ掃除を始めた。その日以来、父の豪快なおしっこ音は響いていない。

雪平鍋

入れ物がなかったから雪平鍋の中に入れた。金魚を。帰ってきたママが悲鳴を上げる。「どう
いうこと？」「なにが？」僕は訊き返す。「これよ。なぜお鍋の中に金魚が入ってるのよ」ママ
は顔をしかめる。ガスコンロの上に置いたのがまずかったなと僕は思う。もちろん火にかけては
いなかったのだけれど。

茸

闇に大きな茸を見つけた。「ちょっと雨宿りさせておくれ」そう言って傘の下に入った。「断りを入れてきたのはお前さんが初めてだよ」茸が喋った。「申し訳ない。道に迷ってしまってね」朝になると茸は姿を消していた。わたしはなんとか麓の村に辿り着いた。村人から人喰い茸の話聞いた。

サメ肌

「私がサメ肌だから冷めたのね」釈子は悲しげな顔で言う。「馬鹿な。俺たちはサメ族なんだからサメ肌でいいんだよ。ざらざらした感触が気持ちいい。そうだろ？」「嘘つき。あなたイルカ族の子と浮気してたじゃない。やっぱりツルツルお肌が好きなのね」釈子は胸ビレで目を覆い、さめざめと泣いた。

炊飯器

腰を抜かした。炊飯器の中に女の頭が入っていた。もう一度見る。空っぽだった。目の錯覚。備え付けの家具家電は有り難かったが、さすがに炊飯器は気持ち悪い。だが取りあえず今日だけはと思い、米を炊いた。いただきます。ごはんを頬張ると奥歯に何かが引っかかった。長い髪の毛だった。

冷蔵庫

こちらの製品でしたら成人男性がそのまま入ります。店員は言う。小型の冷蔵庫になると上半身と下半身とを切断する必要がある。コールドスリープ明けの技術では接合と蘇生が同時に行えるはずだと言われてはいるが、やはり不安だ。結局、一番大きな冷蔵庫に決めた。これなら妻と入れる。

テスト

テストのヤマが外れた。答案用紙を裏返した。ほかにやることがないのだからしかたがない。僕は恐竜を描きはじめた。途端に周りの音がふっと消える。ブラキオサウルスが草を食み、プテラノドンが空を舞う。そして僕はトリケラトプスの背中にまたがって、静まり返った教室を後にする。

深海人

珍しく深海人が網にかかった。眼球は無残に外に飛び出し、長い舌は胸元まで伸びている。水掻きのついた手にはメモが握られていた。漁灯を消すと文字が浮かび上がった。「父さんはもうだめだ。大介、母さんを守ってあげてくれ。美代子、今までありがとう。君と一緒になれて良かった」

左手

苦勞してジャブ仕事部屋にジャブ小型のサンドバッグをジャブ吊した。左手にジャブ10オンスのグローブをジャブはめ右手で文字をジャブタイプする。ジャブ、ジャブ、ジャブ、ボディ。駄目だ。どうしても左手に意識が行き、右手がおろそかになる。私に殴り書きは向いてないよ
うだ。

リモコン

「おい。テレビのリモコンがないぞ。油断をするとあいつはすぐにどこかに行くな」「お父さんが汚れた手で触ったりお茶をこぼしたりするからですよ」「馬鹿。お前がラップを巻いたりするから息苦しかったんだよ」普通に使えるだけでいいのに……。リモコンは筆筒の陰で呟いた。

星の子

海に落ちた星の子はそれなりに楽しく暮らしていました。ただ、日がしずむと海面ごしに故郷の夜空が見えて、少し淋しい気持ちになります。両親の顔を思い出すのです。やがて命を失って、真っ白になった星の子は、夜空に帰ります。もう落ちてきちゃだめだよと海の仲間たちに見送られながら。

双子

双子の少年は同じ物を買って与えられ、全く平等に育てられた。一つしか手に入らない物は自分達で半分にして分けた。甲虫でも蝶々でも。学校に上がると双子は一人の少女を好きになった。双子は彼女の手を掴み、強く左右に引っ張った。「痛い、大嫌い！」双子は仲良く失恋し、悲しみを二人で分け合った。

ジャップ

ハイジャップ！ 呼ばれる時はいつもそうだ。名前で呼ばれた事など一度もなかった。振られる仕事は雑用ばかり。酷い話だ。俺は辞める前に嫌がらせをしてやろうと思った。自分の性器のコピーを取って奴らのデスクに貼り付けてやったのだ。次の日の朝の連中の驚きようときたら。「なんて小さいんだ！」

話し相手

孤独だった。話し相手が欲しかった。いいことを思いついた。物と話せばいいじゃないか。部屋をぐるりと見回すと、しまい忘れた扇風機が目に入った。まず弱風のスイッチを押した。翼がゆるりと回り始める。優しい風が僕の頬を撫でる。膝を正して話しかけた。こんにちは。声が震えた。

今年の雪

ちらちらと雪が舞い始めた。それを見て、嫌ねえとお隣の奥さんは言う。お宅の健ちゃんも雪が大好きだからいいじゃないのと私が言うと、だから困るのよと彼女は顔を曇らせる。「なぜ？」「あの子すぐ雪を口にするでしょ。よく言い聞かせなきゃ。今年降る雪は絶対に食べちゃダメって」

タコさんウイナ

タコさんウイナは身体がうずいていた。潮の香りがしたからだ。やはり遠足の行き先は海浜公園だった。少年が弁当箱を開けた途端、タコさんウイナは逃げ出した。海に飛び込んだ。溺れた。必死にテトラポッドに這い上がった。タコさんウイナは思い知らされた。海は甘くない。

片思い

好きな人ができた。幼馴染の悠也に相談すると素っ気なく、告白すれば？と言われる。「横顔が一番好きなの。もし付き合うことになったら見れなくなるじゃん」「隣を歩けよ」「お店ではどうするの」「カウンターがあるよ」「じゃキスする時は？」「頬にしろよ！」悠也はなぜか怒ってそっぽを向いた。

スライム

植込みの陰にスライムが隠れていた。近づくとスライムは怯えた表情を見せる。「苛めたりしないから」スライムは怪我をしていた。僕は鞆から薬草を取り出した。「これ食べな」スライムの傷はすぐに癒えた。「もう街に出てきちゃだめだよ」キメラの翼を渡すと、スライムは森の方角へ飛んでいった。

活字中毒

完全に活字中毒ですね。と診断される。予想通りだ。新聞、本、雑誌。何でも良かった。荒んだ日々を過ごしていても活字を追っている時だけは心が和んだ。その結果依存症。致し方ない。して先生。俺はどうすればいい？ この薬を。小瓶の中に紫の液体。飲めば全ての文字がゲシュタルト崩壊します。

同窓会

同窓会の葉書が来てるわよ。と実家の母親から電話。葉書って。メールで送れよ。と脳内で突っ込む。いつの？ 高三。そうか。高校の連中はもう誰も俺のアドレスを知らない。卒アルで復習しないと級友の名前も思い出せない。どうするの？ いいよ。捨てといて。そしたら次はもう来ないから。

おでん

コンビニのレジ横のステンレス製のおでん鍋のすみっこから俺は今日も世界を眺めてる。この湯に浸かってはや三年三カ月。だしは継ぎ足し継ぎ足しでますますいい色合いに染まってきていた。次々と新入りが入ってきては売れてゆく中、なぜか俺だけがいつまでもいつまでも鍋のすみっこで売れ残っている。

誘拐

ポケットの中で携帯が震えた。「はい」「お前の妻を誘拐した」「ありがとう。これでやっと家に帰れるよ」私はマスターにお勘定と目で合図する。「なんだと、俺たちは身代金をだな」「金ならいくらでも払うよ。でも彼女は返してくれなくていいから」「それは困る」「困る？ 金が欲しくないのか？」

立ち読み

僕は棚の端から順番に本を読んでいた。店の老主人は子供の立ち読みは咎めない。棚の奥で少女が立ち読みを始めた。二人の距離は日に日に縮まり遂に一冊の本に同時に手が伸びた。先に読みな。僕がそう言うと彼女は首を横に振った。字が読めないの。ずっとあなたの真似をしていただけ。

犬

犬のように舐めろ、と彼は言う。私はベッド脇に立つ彼の前で四つん這いになる。右手を伸ばそうとすると、手は使わずに。やんわりたしなめられる。私は舌を出し、犬のように舐める。彼は動かない。見上げてみても表情は窺えない。口に含む。脈打つのが分かる。濡れてくるのが分かる。

檜の木

庭の檜の木を切ることになった。増築の為だ。物音がした。顔に何かが当たる。慌てて電気を点けた。天井は檜の枝で覆われていた。そこから団栗が降り注いでくる。俺は飲み込まれる。判った、木は切らない！ あなた？ 妻に起こされた。いつもの寝室だった。シーツの上に一つだけ、団栗が落ちていた。

ガリバートンネル

回転寿司を食っているとベルトコンベヤーの出口に目がいった。ドラえもんのガリバートンネルのような体なのである。覗いてみると確かに皿は巨大化しているように見える。だがその先は窺えない。向こうには何があるんだい？ 店の者に尋ねてもシィと唇に指を当てるばかりで何も教えてはくれなかった。

巡回

黒のスラックスにベストを着て大型電気店の中を巡回する。客に呼び止められる。私は淀みなくそのテレビの特長を説明する。客はこれに決めた。と言う。暫しお待ちを。私は本物の店員を呼ぶ。この方がお買い上げだそう。客はきょとんとしている。別にマージンも何もない。これが私の趣味なのだ。

約束

夏の暑い日だった。私は路地裏で見かけた白いワンピース姿の少女のことを思い出していた。あれからもう八年の月日が過ぎている。彼女はきっと綺麗になっていることだろう。私はタクシーに着替え、花束を用意した。それが約束だった。掘り出してみると彼女は美しい骨になっていた。

ジョンの命日

雨降りて気が滅入っているというのに目の前の男はもしジョンが生きていたらどうのこうのと退屈な話をやめようとしな。私誕生日は忘れてたくせにジョン・レノンが死んだ日は憶えてるのね」嫌味をぶつくと男は心外だと言う。「今日はジム・モリソンが生まれた日でもあるんだよ」

アイス

寒さに身体が震えた。冬にソーダ味のアイスはさすがにきつい。それでも私は毎日仕事帰りに食べていた。夏からずっとだ。裸になった棒を街灯の下で検分する。「あたり」やっと出た。次の週末、これを持って会いに行こう。私を置いて行ってしまったあいつに。天国で食べたらいよいよ。もう冬だけどね。

月食

月が完全に隠れてしまう前に告白する。そう決めていた。彼は夜空に見入っている。残りあと僅かというところで肩を叩いた。彼の顔が私に向く。好き。緊張のあまり声が出なかった。でも唇の動きで伝わったはずだ。うん。と彼はうなずく。月。と口にする。「食べられちゃったね」違う！

足首

足首を畑に埋める日。マルクも私の真似をして足首を畝に突き刺している。「逆だよ。切り株を上にして埋めるんだ。体が土の中に生えてしまうだろう？ お日様を拝めないのは可哀想だとは思わないかい？」マルクは自分が突き刺した足首を埋め直した。「そうだ。秋にはヒトを収穫できるぞ」

影

寝静まった街の外れに蠢く影があった。夜食を食べ終えたばかりの烏は電線の上で目を細める。見えた。鮭を啜えた木彫りの熊だ。烏は地上に舞い降りた。君たちは何をしている？ 帰るのさ。故郷に。鮭を啜えた木彫りの熊の一匹が喋りにくそうに言う。鮭を離せばいいのに。烏は思った。

集団面接

この日は10人の集団面接だった。Aグループの方どうぞと案内の女性に言われて部屋に入る。ところが中にもぬけの殻。椅子も机もない。どういう事だ？ 僕らは顔を見合わせる。さっきの女性に訊こうと思いドアノブを握ると外からロックされている。違和感を感じた。人数を数えてみた。11人いる。

RUNNER

子供の頃から走り続けていた。止まると死んでしまう奇病だそうだ。可哀想？ あいにく僕は走ることが嫌いじゃない。ベッドの上で寝てみたいと思うこともあるが贅沢は言わない。だって僕の給水や給食、トイレの為にキャンピングカーで伴走してくれている両親の方がずっと大変なのだから。

砂漠

気がつくとき砂漠に倒れている。口の中の砂を吐き出す。立ち上がり、歩き始める。すぐに硝子の壁にぶつかる。外から翠色の眼球がおれを見つめている。足下の砂が蠢く。すり鉢状に沈む砂漠におれは吞まれてゆく。砂。砂。砂。闇に落ちる。気がつくとき砂漠に倒れている。

バットマン

ぽんぽんぽん。ネクストバッタースサークルでおれはロージンバッグをお手玉する。まさかの打者一巡。しぶとい野郎だ。お前ら9人もいて何やってんだ！ 客席から汚い野次が飛ぶ。ぽんぽんぽん。おれは金属バットの感触を確かめる。死刑囚はまだ死なない。では本気のスイングを見せてやるか。

ふりだしに戻る

目の前の学生はバカなくせに教授である私にたてついてくる。それでも私は根気よく話した。しだいに学生の表情に変化が見えてくる。そう、凍りついた雪が春の日差しでとけてゆくように。ついに学生はほがらかな顔で言う。先生のお話のおかげで、僕の考え方も360°変わりました。

専用車両

扉が開いた途端、思わず悲鳴を上げてしまった。駅員が飛んでくる。慌てて訳を説明する。目の前に腐った顔が並んでいたからだと。危うくゾンビ専用車両に乗り込むところだった。飼い慣らされた彼らが人に危害を加える事はないが、それでも混雑した車内で体が触れ合うのは耐え難かった。

おやすみ

ずっと食べ続けている。冷蔵庫の物も床下の食料庫の物もあらかた食べ尽くしてしまった。近所のそば屋に出前を頼む。メニューの物全部。完食。さすがにげっぷが出る。体重をはかってみると245kg。やっと目標値に辿り着いた。僕は目覚まし時計を春にセットする。おやすみ。世界。

ごみ袋

何かを引きずるような音で目が覚めた。カーテンの隙間から表通りを覗いてみると、黒いごみ袋が三つ四つ、ずるずると地面を這っている。動物でも入っているのだろうか。気味が悪くなって警察に通報した。ごみ袋はある男性の部屋の前で見つかった。中には切断された彼の妻が入っていた。

命がけ

チュンチュン。これが小鳥のさえずりならかわいいものだが実際には強化ガラスが銃弾を弾く音だった。身辺警護の為に雇った傭兵がすかさず櫓の周りを取り囲む。この国に入る時はいつも命がけだった。クリスマスを中止に追い込もうと目論む大きなお友だちとの戦いに終わりはなかった。

縄

からっからに干した人間を縊って一本の縄にする。これを血の海に垂らしてやる。毛細管現象というやつで血が縄を駆け昇る。乾き切っていた身体に血が巡り人間が生き返る。歓喜の声を上げながら血の海に墜ちていく人間を拾う。絞る。干す。縊って縄にする。この繰り返し。時給800円。

泣き男

私は泣き男だ。他人の葬儀に呼ばれてはそこで派手に泣く。悲しみなど感じない。仕事として泣くだけだ。私が泣くと参列者たちも堰を切ったように泣きはじめる。涙は彼らの魂を洗い流す。私は父から受け継いだ仕事を誇りに思っていた。その父が今朝死んだ。私は泣き方が分からなかった。

記憶

最初はきみがわたしに声をかけてきたんだよ？ 彼女は得意気に言う。初デートは映画だったよね。正直内容は微妙だったけど面白かったって言った記憶がある。そうだったのかよ。誕生日でしょ。初めての喧嘩。彼女は手帳をめくり、二人の一年を振り返ってゆく。なにしろ今夜は憶年会。なんだそうだ。

自炊代行業者

「七人の作家が自炊代行業者を提訴」テレビの画面にテロップが出ている。耳の遠い父がそれを見て唸る。明らかに感心ではなく苛立ちの唸り。「金持ちのくせにけつの穴のちいせえやつらだ」吐き捨てるように父は言う。「気どりやがって。なにが自炊代行業者だ。ようは家政婦だろ？」

葉。呼びかけると彼女は話を中断する。私は用を足してくる。続きを頼むよ。彼女はふたたび話しはじめる。私は彼女が語る本の物語に夢中になる。おしまいおしまい。彼女は目を閉じる。ありがとう。楽しかったよ。彼女は立ち上がり本棚に入る。昔は本が紙だったなんて。信じられない。

ミスタードーナツ

わたしの穴をきみにあげよう。ミスタードーナツは言う。なぜ？ ぼくは訊き返す。今日はクリスマスイブだからね。ミスタードーナツはそう言って笑う。穴がなくなってもいいの？ 平気さ。ミスタードーナツは穴をひょいと投げた。ぼくの胸に大きな穴があき、やっと痛みがなくなった。

クリスマス

僕は人間に化けて街へくり出した。ところに行く先々でクリスマスに参加する為には恋人が必要だと言われる。片っぴしから声をかけた。僕と付き合ってください。断られ続けた。クリスマスは終わってしまった。僕はキツネの姿に戻る。クリスマスなんて、恋人なんて、すっばいに決まっている。

演出

どんっ。腹に衝撃。うう。朝から無防備なボディにヒップアタックをもらえば誰だって悶える。「パパ」「はい?」「サンタさんきてない」彼女は私の腹の上で空っぽのくつ下をぶらさげ泣きベソをかく。すっかり忘れていた。「ごめん。きょう買いに行こうか」「パパ。演出が大事なのよ」

名前

きみの名前は？　ないわ。ないことはないだろう。ほんとうにないの。どういふことだい？
すきな人ができたの。かれもわたしの気持ちにこたえてくれたわ。でもね。条件を出されたの。
かれは云ったわ。きみの名前がほしいって。それであげたのかい？　ええ。だからわたしには名
前がないの。

うどん

うどん。食べ切れなかったら無料。楽勝じゃないか。残せばいいのだ。おれは暖簾をくぐる。うどんを一杯おくれ。どん。と出てくる。大きな器に金色のだし。うどんが泳いでいる。一本すする。その一本が長い。すすれどもすすれども途切れない。ついに息も切れ、ぷつりと、うどんは切れた。

Scan

「Scanをたのむ」「Mediaはどうされますか?」「このUSBMemoryに」案内人は怪訝な顔をする。「Flakeではなくて?」「ああ。古いMediaだがこの中に妻が入っているんだ」「再生は難しくなりますよ」「妻も私も再生は望んでいない」「ではお届け先は――」「Heavenで」

きのこマン

ふと気づけば身体中にきのこが生えていた。警官と大家が部屋に突入してくる。おおかた異臭に耐えかねた近所の住人が通報したのだろう。身も心もすっかりきのこマンと化していたおれは即刻担ぎ出されて入院。ところがおれの身体のきのこは取れない。今では夜な夜なナースどもの性奴隷になっている。

引き取り

「引き取りです」「ではお名前をどうぞ」「山本のかかです」「そのまま前にお進みになってお待ち下さい」「ママ!」「おまたせ」「12時間のご利用で6000円になります」「お世話になりました」「ありがとうございました。またのご利用をお待ちしております」ドライブスルーってほんと便利。

チキン

カーネル・サンダースは1ピースの窓際チキンを社長室に呼んだ。かけなさい。チキンはチェアに座る。君も知っての通り、クリスマス商戦は終わった。うちも鶏員を削減しなければならない。どうだ？ 早めのリタイアというのは。もちろん退職金は弾むよ。チキンの額に油汗が浮かんだ。

蜘蛛の子

湯を張ろうと思い蛇口を捻ると蜘蛛の子が出てきた。慌てて締めるも奔流は止まらない。山椒の実の様な其れは美しかった。私は居ても立っても居られなくなってしまった。着物を脱ぎ散らし蜘蛛の子の海に飛び込んだ。嗚呼、肌を愛撫され声が漏れる。天井を仰ぐと母蜘蛛が微笑んでいた。

メールを打っていると肩を叩かれた。隣の女性が左胸に手を当てて何か口にする。電車の音で聞こえない。女性はもう一度ささやいた。「ヘルスマーターを付けてますから」なるほど。優先座席ではなかったが私は頭を下げて席を立った。それにしても。彼女は何の重さを量っているのだろう。

彼女

彼女はあまりにもやわらかすぎた。地震が起きるたび彼女はこわれてゆく。胸、お尻、二の腕、太もも。やわらかいところから順に液状化は始まった。ぼくは彼女まみれになりながら溶けた彼女を抱き上げビニールプールに寝させる。どろどろの肉塊に浮かんだ彼女の眼球は涙でうるんでいた。

ペーパー・ナプキン

ペーパー・ナプキンは窓の外を眺めていた。退屈な会話は聞いてられない。彼が置かれたテーブルでは冴えないカップルがコーヒーを飲んでいた。「あら。始まったみたい」突然女が声を上げる。「困ったわ」「何が？」女はペーパー・ナプキンの体をつかみ、いそいそとトイレへ向かった。

幽体離脱は始まらない

幽体離脱は始まらない。そんなタイトルを付けたくなるような光景だろうがあいにくこれは双子のお笑いコンビの持ちネタではない。今夜も僕はすやすやと眠る妻の真下でブラジャーの役目を務めている。僕の手ブラで君の美乳を重力の魔の手から守るから。それがプロポーズの言葉だった。

落とし穴

落とし穴に落ちた。やられたと思った。きっと近所のクソガキどもの仕業だろう。おれは受身の体勢をとった。柔道をやっていたから少々地面に叩きつけられたところで堪えない。筈だった。ところがだ。いっこうに底につかない。かれこれ2時間は落ち続けている。光はすぐに小さくなり、やがて、消えた。

キス

空からキスが降ってきた。魚のほうだ。後から聞いた。ファフロッキーズ現象というらしい。海沿いのこの村では数十年に一度キスが降るのだ。鍋！ 油！ 粉！ 卵！ 天ぷらじゃ！ 幼い妹は揚げたてのキス天をほふほふと頬張る。おれはその頬にキスをする。あいにくおれは魚が食えない。

炬燵

炬燵の中は見ては駄目。母は言う。私は諦め切れない。母がうとうとし始めた隙に中を覗いてみる。真っ暗だった。いきなり何者かに引きずり込まれた。なぜか炬燵の外には出られない。呼んでも呼んでも母の返事はない。暫くすると子供の足が入ってくる。炬燵の中は見ては駄目。外から母の声がした。

趣味が高じて蕎麦屋を始めたは良いが一年を通じて一人も客が来なかった。暖簾を仕舞い店に入ると老人が席に座っている。いつの間に。「蕎麦はあるかい」「はい、只今」「実は私は今日で定年退職でね。あなたも来年は商売をがんばんなさい。きっと良くなるから」老人の背中には貧乏神と書かれていた。

天使たち

死体は北極海を漂っている。淡い光が近づいてくる。天使が迎えにきたのかと死体は思う。だが違う。透明の翼に透明の胴体。クリオネの大群だった。流氷の天使たちは頭部から捕食用の触手を繰り出す。死体の膚は突き破られる。食事がはじまる。死体の表情は緩み、遂に魂は解き放たれた。

出頭

「最初は警視庁に出頭しましたが取りあって貰えませんでした。昔の事件ですしからかっているとされたのでしょうか。近くの交番にでも行けと軽くあしらわれまして。ところがその交番でも門前払い。今度は隣町の署に行けと。後はその繰り返しです。それでとうとう」「沖縄まで来たのか」

笑い屋

私は笑い屋である。テレビ局の仕事が殆どだが年始は崩壊家庭から声がかかることも多い。正月ぐらい明るく過ごしたいというオファーに私はこう答える。私はお笑い芸人ではありません。あくまでリアクションとしての笑い芸なのです。会話すらないご家庭ではお役には立てませんよ、と。

エイリアン

渋滞は人間が生み出したものの中でも最悪の部類だ。私はハンドルを指で叩く。突然助手席のドアが開いた。上司が乗り込んでくる。「異動だ。次の星へ向かうぞ」「人間のように辞令は予め出して貰いたいものだな」「何?」「いえ、独り言です」アクセルを吹かすとクルマはふわりと宙に浮いた。

眠気対策

昨夜は日が暮れると同時に床に就いた。睡眠時間はたっぷり十二時間。起きたら起きたですぐに冷めたい水で顔を洗い、朝食も摂らずに濃いコーヒーを飲んでいる。家族全員がだ。胃には良くないが仕方があるまい。前回は妻も二人の息子も寝てしまったのだから。今日は羊の棚卸しだった。

傷んだ滑走路に足を踏み入れる。静かに走り始める。この場所でなら飛べそうな気がしていた。スピードを上げる。だが身体は浮かない。滑走路はすぐに途切れ、Uターンを余儀なくされる。ふたたび駆ける。耳元で風が鳴く。乗せて欲しいか？ ジェット機の亡霊が今夜も囁きかけてくる。

ごめんね

「親父の会社が人手不足で良かったな」夫は笑顔で言う。「お義父さんのところなら安心だものね。感謝してます。お義父さんにも、あなたにも。あと、子守させてごめんね」「俺は在宅仕事だからいいんだよ」私は胸の中で優しい夫にもう一度ごめんねと謝る。この子、あなたの弟なのに――

文字垂れ

天井からぽたぽたと文字が落ちてくる。上階に住む小説家が書棚でも倒したのだろうか？ 達三は文字垂れのちょうど落ちるところへ要らぬ紙を敷いた。すると文字は勝手に整列しはじめる。見る見る間に文章が紡がれる。これは面白い。達三は端紙を脇へよけ、代わりにそこへ原稿用紙を置いた。

穴

穴はどこだい？ 部屋に入った途端に男は言う。男性の客は大抵、間取りやベランダからの眺望よりも、まず穴のことを気にするのだ。トムは男を穴のところへ連れてゆく。「素晴らしい穴だね」「お試しになりますか？」男の顔が一気に緩む。トムが後ろ手にドアを閉めると、すぐに吐息が聞こえてきた。

バス停

病院の目の前にバス停ができていた。ところが見舞い客も通院患者も、誰もバス停を利用していない。おそらく新路線だろうし、まだ本数も少ないのだろう。そう思った。私は車いすですぐ表へ出た。バス停で時刻表をしてみると、書かれていたのは私の名前、迎えの時刻、その一行だけだった。

目玉焼き

目玉焼きを作ってくれという男が現れた。金持ちの変態だ。おれは男の眼球にスプーンを当て、一気にえぐり出す。お留守になった眼窩には男が用意してきた水晶玉を挿れてやる。「見てていいか?」「ああ」よく熱した鑄鉄のフライパンに眼球を落とすと変態男は悦びで身体を痙攣させた。

ポジションあらそい

わたしがセンターだもん。わたしがセンターだもん。わたしがセンターだもん。にんげんのおんなのこたちがポジションあらそいにせいをだしているあいだにぼくはストーブのまえのポジションをひとりじめしてぬくぬくだ。とけいを見る。ばんごはんまであと5じかん。おやすみ、ガールズ。

浴室

少女は浴室の中で暮らしていた。そこが彼女の世界だった。バスタブの中には大きな魚が住んでいた。陽の射し込まぬ浴室には昼も夜もなかった。眠たくなると少女はそっと水に浸かり、無口なルームメイトを小さな胸に抱いて寝た。少女は美しく育った。やがて彼女の腹は膨らみはじめた。

肉屋

じゃあ肉屋に行こう。と彼は云う。お出かけしようよ。とぼくが声をかけるとこれだ。本屋に行こう。肉屋に行こう。大抵どちらかの返事が返ってくる。本屋はまあいいとして、肉屋ってなんなの？ 彼が云うのは焼肉屋ではない。グラムいくらの肉屋なのである。ねえ、きみは肉をながめて楽しいの？

不思議な物体

無人探査艇は水深10000mの海底で不思議な物体を発見した。海上からの指示を受けロボットアームで採集する。重そうな物体を引っこ抜くと海底にはぽっかりと穴が開いた。途端に激しい海流が発生する。探査艇は一瞬で穴に呑み込まれる。世界各国の沿岸部で海面が下がりはじめた。

成人式

会場の前に居ても誰も私に気付かない。成人式に出ないと言うと母に泣かれた。あっさり折れた。普段着で行くつもりが振り袖を用意され美容室まで予約されていた。なのにこのざまだ。泣きたかった。会場の中には入らずマックで時間を潰した。「ただいま。みんなに会えて楽しかったよ」

試験的に

試験的に試してみようよ。ね？ 何につけても及び腰の僕に、彼女はよくそう言った。付き合う時、同棲する時、結婚する時。手を引いてくれるのはいつも彼女だった。君が死んだら僕は生きていけないよ。痩せ細った彼女はベッドの中で微笑んだ。大丈夫。試験的に試してみようよ。ね？

試験官

カンニングの準備は完璧だった。見回りをする試験官の死角を徹底的に研究して編み出した手法に死角は無いはずだった。そう、試験官が現れるその時迄は。赤ん坊の声が近づいてくる。教室の扉が開く。学校側がカンニング対策に寄越したのは、試験官ベイビーだった。

半身

茂みから女の足。突き出している。草を掻き分け覗き込む。青白い下半身。だけ。棄てられたマネキン。そう思う。脛を蹴る。柔らかい。俺は叫ぶ。お巡りが飛んでくる。数日後。犯人は捕まる。容疑は殺人じゃない。傷害そして監禁。犯人の自宅ガレージには人魚鉢が置かれていたそうだ。

眠り

私は眠るのが怖い。眠りは死だ。小さな死などと云うレトリックではない。私の眠りは文字通り死なのである。朝目覚めた時、私には何の記憶も残っていない。昨日の私がそうしたように今日の私は明日の私のために日記を書く。昨日の日記の冒頭にはこう記されている。私は眠るのが怖い。

食事

ママの目を盗んでロールパンを一つ、パジャマのおなかに隠す。ごちそうさま。ぴよんと椅子から飛び下りて、私は二階に駆け上がる。あら、もういいの？ 後ろでママの声がする。彼の食事はいつもそうやって調達していた。昨日も悪夢から守ってくれてありがと。ベッド下の怪物さん。

ゲーセン

ゲーセンで女の子に声をかけられた。噂は聞いていた。最近めちゃくちゃかわいい子が来てる。しかも強いと。試験前ではあったが常連が全員ボコられたと聞いては黙ってられない。この界限では俺がナンバーワンだ。返り討ちにしてやった。強いわね。彼女は俺の耳元で囁く。あなたに仕事を頼みたいの。

迷子

うっかり宇宙船をどこに停めたか忘れてしまった。仲間ともはぐれた。無線は充電し忘れたせいで使えない。最悪だ。おれは途方にくれる。次第に腹も減ってくる。牛丼屋に入ることにした。地球以外の星で食べるのは初めてだ。気密扉を抜けるとカウンターの客が一斉に振り返る。仲間はそこに居た。

蛇

蛇に飲まれた。丸飲みなので痛くはなかった。蛇は僕に話しかけてきた。声に出さずに意思疎通できたのだから一種のテレパシーのようなものだろう。僕らは会話を楽しんだ。だが困ったことに体が溶けてきた。蛇にそのことを伝えると彼は僕を吐き出した。もうテレパシーは通じなかった。

でんぐり返し

男は生まれて初めてでんぐり返りに成功した。とても気分が良かった。心が晴れ晴れとした。男は何度もでんぐり返りした。心も体もどんどん軽くなっていった。いつしか男は手足も頭も失くして完全な球体になっていた。即ち肉団子だった。肉団子は道端でただただ佇んでいた。誰も拾う者は無かった。

魚人

魚人は我が儘な人魚に恋をした。「私、魚肉ソーセージが食べたいわ」魚人は自らの身を削いでソーセージを作る。魚を殺めるのは忍びなかったからだ。「まあまあね。毎日届けて頂戴」魚人の魚部分は骨となり人肉だけが材料となる。「不味い。もう結構よ」振られた魚人は海の藻屑となってしまった。

ホッキョクグマ

白い防護服にガスマスク。ホッキョクグマのような群集が駅のホームを占拠している。機械的なアナウンスが流れ、列車が滑り込んでくる。ホッキョクグマ達は黙々と車両へ乗り込んでゆく。すし詰め状態だが愚痴をこぼすものはいない。未だ国から避難命令は出ない。むろん会社は休めない。休めないのだ。

ゾンビスーパー

閉店時間を知らせる音楽が流れ始める。早く食材を見て回らないと。腿肉をカートに入れる。耳が見切り品になっていたのもうこれを買うことにする。あとは味噌だ。天然物の値札を見てため息が出る。だがこれを買うしかない。養殖人間の脳味噌で作った味噌汁は不味いと夫がうるさいのだ。

mail

ポケットの中でphoneが震えて目が覚める。鶴翁の退屈な授業はまだ続いている。机の下でmailを確認する。菜々からだ。「雪降ってる」窓の外を見る。たしかに。風に雪が舞っている。参ったな。チャリなのに。またphoneが震える。「自転車なのにね」おまえはエスパーか。

雪玉

東の都で空の木に雪が積もる。大風で雪の塊が落ちる。碎けて小さな雪玉になる。大地震以来、国は傾いていたから大変だ。転がり始めた雪玉は雪やら土やら石やら猫やら犬やら人やら家やらビルやら何から何まで次々と巻き込んで膨張して暴走する。都より西はすっかり更地になってしまう。

黒髪ロング

ネットで黒髪ロングの女の子と仲良くなった。会いたいと僕が云うと、二週間待ってと彼女は云う。二週間後、待ち合わせ場所に彼女は髪を引きずって現れた。地面を這う黒髪は通りの遙か向こうまで続いている。髪長いね。洗うの大変でしょ。僕は云う。彼女は指を二本立てる。二週間もかかっちゃった。

用なし

神様の部屋のチャイムが鳴る。「どちら様ですか」「死神です」「お引取り下さい」死神がなんどもチャイムを鳴らすので神様はしぶしぶドアを開ける。「あなたもしつこいな。いい加減にして下さい」「どうか私に仕事を下さい」「あなたはもう用なしなんです。人間は絶滅したんだから」